

BIOHAZAD ～最悪なこの世界を生き残る

博霊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある都市、ラクーンシティその名を知るものは多くそしてある時をさかいにそこは地獄と化した。しかしその地獄を生き抜いた者は多くそして皆口を揃えて一人の青年のお陰だと言った。この物語はある一人の青年を描く物語である

「ある事情によりタイトルと設定オリキャラ等を修正しました勝手ながらすいません」

(この作品はうぷ主の息抜きで書いているものなので投稿頻度は低いと思います)

目次

第1章プロローグ	1
第1話、洋館編	4
第2話く父の謝罪と息子の決意	7
第2章ラクーンシティ編第3話く動き出す歯車	15
第4話ゴースト始動	18
隊員紹介	22

第1章プロローグ

とある研究施設、ことの始まりはここでありそしてここから一人の青年の物語が始まった。

「はあ、はあ、なんだよあいつら」

彼の名前は白峰冷数カ月前にこの施設につれてこられた青年である

「まあいいや取り合えずこの部屋を探索しないと」

そう言うとは彼は部屋の中を探索しだした、そして彼は複数の書類を見つけた

「なんだこれは？」

(科学者の日記)

○月×日 今日からT ウイルスと共に新たなウイルスD ウイルスの実験を始めることにした

○月×日 D ウイルスの被験者数名にこのウイルスを投与した。

○月×日 あれから数日後このウイルスの適合者は一人現れたそして一人は今までと変わらず正常だった

○月×日 大変だ！どうやらTウイルスが漏れたらしいこのままではここはゾンビだらけになってしまう。

○月×日 どうやら私もここまでらしい、なんとかDウイルスの適合者のトビラは、開けておいたなんとか逃げ切ることを願うばかりだ。そしてもしこれを読んでいる人はこの部屋の引き出しに隣の部屋に行けるカギがあるそのなかにあるものは自由に使って欲しい

「どうやら俺に投与されたのはDウイルスって言うものらしいそれとその引き出しに扉のカギがあるらしい」

そして冷は隣の部屋のカギを開けた、そこには大量の銃や防弾服な

どさどさまなものが会ったそして他には一つの手紙が有った

「へえ、凄いなこれは」

「取り合えず着替えるか」

青年着替え中、、、

装備を揃えた彼は一つの手紙にめを向けた

(研究者の手紙)

もしこのてがみを読んでいる人がDウイルス適合者ならば良く聞いて欲しい。君に投与したDウイルスそれは君の身体能力を底上げし、他のウイルスに対しても耐性がある。そしてこのウイルスは君の身体に定着しているため実験が出来ない。そのためDウイルスは君の物だから好きに使って欲しい。そしてこんなことに巻き込んだ私達を許して欲しい、お詫びとしてこのてがみにコンタクトレンズを同封したそれは必ず君の役にたつだろう

「なるほどそれならばありがたく使わせてもらおうよ」

そう言つて冷は同封されたレンズとインカムを着けたそうすると装備のなかに付属されていたインカムから声がした

「あの一」

「何だろう声がするな？」

「あの一」

「あの一！聞こえていますか！」

そして冷はインカムから聞こえていることに気づきインカムを着けた

「あの私の声聞こえていますか？」

「あ、ああ聞こえているけど」

「よかった私はあなた様達のナビゲーションをするために作られた半独立型システムです」

「半独立型システム？」

「はい、私は他のシステムとは違い自我をもちます、なので私はどんな

状況下でもサポート出来るようになっていきます」

「なるほど、ところで自我があるって言うことは名前とかもあるのか？」

「はい私は冷様のサポートを担当します菊と言います」

「そうかわかったありがとう、それと君の声はインカムを通じてないと聞こえないのか？」

「いえ、直接脳に話しかけることもできますがインカムをどうしての会話のほうがいいと思ったので」

「なるほどわかったありがとう」

「はい、これからよろしくお願いいたします冷様それと少しそのコンタクトの説明をしますがよろしいでしょうか？」

「そうだな少しお願いするかな」

「はい、そのコンタクトは私達を作った博士があなた様の為に作られた多機能コンタクトです」

「なるほど要するにこのコンタクトはこの手紙を書いた人が僕の為に作ってくれたと言うわけだね」

「はいそう言うことです。因みに冷様が着けたコンタクトずっと着けていても眼に異常等はないので安心してください」

「へえー色々と凄いな」

「取り合えずこの施設からでないといけないな」

「というわけで菊この施設からの脱出ルートを教えてくれ」

「わかりましたそれではナビゲートをします」

「わかった」

「こうして僕の最悪な人生の始まりはだった」

第1話、洋館編

あのあと僕はなんとか施設から脱出することが出来た、しかし外に出たやさき回りは森だった、その時森の中から銃声があった、

「ジル！早く逃げるぞ！」

「クリスタメダは追い付かれる」

彼らは今の犬に襲われ彼らはある洋館に逃げようとしていた

「ジル、バリー、クリス、あの洋館に逃げるぞ」

サングラスをした男が洋館の方を指差したその時犬がクリスに襲いかかろうとした

「クリス！危ない！」

「くっしまった！」

クリスが襲われそうになったその時一つの銃弾がそれを救った

「みなさんここは僕がなんとかしますなのであの洋館まで急いでくださいー」

そう言つて冷はM92Fを犬に向かって撃った

「誰かは知らないが感謝する」

そう言つて四人は洋館に向かって走つて行った

「さてと菊敵の情報をくれ」

「わかりました、あの犬型のBOW はケルベロスですあの施設にいた人と同じくTウィルスを投与した生物です」

「なるほどそれは厄介だな」

「冷様右側に敵が！」

「了解」

こうして彼はある程度のケルベロスを倒したあとあの四人達が逃げ込んだ洋館へと向かつて走つた

青年洋館ログイン中、、、

彼が洋館に到着すると先に逃げていた四人が集まった

「君のお陰で助かった礼を言う俺はクリスマスレッドフィールド、クリスマスでいい」

「そして私はジルバレンタインさつきはありがとう私もジルでいいわ」

「俺はバリーバートンさつきの射撃は見事だったそれと俺のこともバリーでいいよ」

「そして私が彼らのリーダーダアルバートウェスカーだ、我々はある任務でこの辺りを調査していたのだがいきなりあの犬が襲ってきたのだ」「そうなんですか、それと僕の名前は白峰冷です」

その時クリスらは、冷の名前を聞くと驚きそしてジルが質問をした「白峰冷、、もしかしてあなた数か月前に行方不明になってた冷君?」「はいそうです」

「君が白峰冷君なのかよかったこれで君のお祖父さんも喜ぶな」「あのなぜ祖父のことを?」

「数カ月前に君のお祖父さんに君の搜索を依頼されてそれでは俺達は君のことを探していたんだ」

クリス達がそう言うが冷はあまり嬉しくなかったそれを気にしたのかジルが話しかけた

「あまり嬉しそうじゃないようだけど何か会ったの?」

「実は・・・」

彼が何かを話そうとしたときどこからか銃声が鳴り響いた

「今のは、銃声か!」

「そうみたいね、クリス見に行きましょう」

そうジルが言うが冷もついていくと言おうとしたそのときバリーが冷のことを引き留めた

「冷、少しいいか君に渡したいものがある」

そう言うがバリーは冷に新しい銃を渡した。

「バリーこれは?」

「これはケンドーがもし白峰冷って人に会ったら渡してくれて頼まれた物だ」

「えっ!ケンドーさんが!」

バリーが口にしたケンドーと言う名前は冷にとっては懐かしい名前だった。以前彼は祖父が知り合いに頼み冷に銃の扱い及び整備の仕方を教えたその人物がケンドーだった、そしてバリーが渡したのは以前自分とケンドーの共同作業によって完成させたサムライエッジ冷モデルだった。

「しかもこれは、僕とケンドーさんが完成させたサムライエッジだ！」

「これ君が作ったのか!？」

「はい、内部パーツとグリップの調整だけですけど後はケンドーさんがやってくれました」

こうして互いに驚きあったが今は銃声がした方が気になりウエスカー以外がそこには向かうことになった

第2話く父の謝罪と息子の決意

あれから何時間経っただろうかこの屋敷では色々と起きた巨大な蛇や巨大な根っこのような化け物がいたそれを僕はクリス達と協力して何とか倒すことが出来た(能力のことや今までのことは全て話した)、しかしそのときわずかながらの犠牲もあった、しかし僕らは進んだ、そして今僕はとある部屋にいてあるものを見ようとしていたそれは、

「白峰仁、、 父さんのものだ!」

それは父さんの名前があったディスクだった、そして僕はそれを近くにあったパソコンに入れて僕はその中身を確認しようとした、するとディスクは一つの映像を映し出した、

「と、 父さん!」

そこには亡くなったはずの父がいた

「やあ冷もし君がこの映像を見ているってことは多分俺はもういないだろう、」

父の声はどことなく悲しげで何処か寂しげそんな感じだった

「先ずは君に謝らなくてはならない、こんなことに君を巻き込んでしまった、だけどそれでもお前は戦わなくてはならない!お前を巻き込んだ元凶アンブレラに」

「アンブレラだって!」

冷は驚いたアンブレラはラクーンシティにある大手製薬会社だからだ

「アンブレラは主に製薬品会社だが裏にはウイルスの実験や生物兵器の実験等のの明るみには出てはならないことをしている、」

(そんな!嘘だろこれが全てアンブレラがしたことなのか)

「だからここまで巻き込んでおいて申し訳ないでも!頼みがある、アンブレラを止めてくれ!その為に勝手だがあるとき実験としようしてお前にDウイルスを投与しただがそれだけでは終わらなかったのだ」

「どういふことだよ父さん」

「他にもう一人だけ適合者がいるんだそれはお前が一番に知っている
そしてその名前は」

その時仁が発した名前に冷は驚愕したそして仁がいったその名前は「篠原桜」彼がこのラクーンシティにくるまえ日本にいたとき彼女と彼女はとてもながく彼が日本を出る時見送りにまできてくれた、だから冷は恨んだ父をウイルスをアンブレラを、自分までもなく友達の彼女までも実験にされていた彼女から平和な日常を奪ったことをひどく嘆いた、しかし彼は一つの疑問が浮かんだ

「それなら、今彼女はどこに?」

そう思うものも無理もない、しかし彼の父、仁は「安心してくれ」そう言うともた続きを話した、

「彼女は今お前の祖父が面倒を見ている」

その言葉にまたも冷は驚愕した、なぜ祖父が彼女といえるのかそしてどうやって彼女を連れ出したのか?もう彼はなにがなんだかわからなくなっていた。しかし相手は映像そのため父は話を続けた

「だから今は俺の親父に会え冷それがお前をためであり彼女のためでもあるそしてしつこいが頼むアンブレラを、いや私たちの過ちをお前
の手で終わらせてくれ」

そう言うとも映像をは消えたそれと同時に物凄い怒りがこみ上げてきた

「、このくそ親父がああああああ!」

「何がどう言うことなんだよ!巻き込んでしまって申し訳ない?それにアンブレラを止めてくれ?ふざけんなよ!」

その後彼は自分の父親に対する不満や怒りそれを全て吐き出した、そしてそれが良かったのか彼の怒りは収まった

「はあ、しかしどうやってアンブレラと戦えばいいんだよ」

そう彼が悩んでいると菊が話しかけてきた

「冷様お話がありますがいいでしょうか?」

「いいよ、話してなに?」

そう言うとも菊は話した、自分をつくったのは仁であることそしてアンブレラのデータ等を菊が持っていることそしてあの時の映像の他

にもうひとつ別のがあることを、

「そうなんだ、それでももうひとつの映像は？」

「もうひとつは私に直接プログラムされています、聞きますか？」

その問いに冷は少し躊躇した、しかし冷は聞くことにした、そして菊はボイスレコーダーみたいに仁の声を再生した

「やあ冷、多分この声を聞いているってことはあの頼み聞いてくれたのかな？」

さっきの映像とは違いこの声はどこか陽気で聴こえているがどこか冷にとつては懐かしく思っていた

「まあ、ぶっちゃけあの話は聴いても聴いてなくてもどっちでも構わないんだ。あれは今の現状と起きていることをお前に知らせただけだからな」

「なんだよそれ」

「取り合えずここからが本音だから良く聞けよ、俺は別にアンブレラと戦わなくてもいいと思っている。理由？そんなの可愛子供を戦わせたくはなないだけだ、」

「、、、」

そしてだいたいの約数分経ったその間仁は自分がなぜ菊をつくったのか等様々なことを話した、、

「まあそう言うことだ、だからここから先はお前が、、いやお前と桜ちゃんと決めて後悔しないようにしてくれそしてこれが最後だ産まれてきてくれてありがとうとお前にはこんな世界しか残せなかった俺を許してくれそして彼女を巻き込んだことを許してくれだけど冷希望は捨てるなそれじゃあな」

そして仁の声はそこで終わった

「これが仁さまが残したレコーダーです」

「、、、」

「冷様？」

「まったく父さんは自分勝手だよ、家族とその友達を守るためにウィルスを作ってそれを勝手に投与するとか、僕達のことなんも考えてないよ、、」

「冷様、」

冷は泣いていた今まで死んだと思った父が残したもののそして今までの日常が壊れてしまったことそして友達を巻き込んでしまったことそれは冷にとつて決して軽いものではない、でも冷は決めたこんな世界だけど今は生きよう、そしてアンブレラを止めようと、冷はそう誓った

「はあく親のミスは子が始末をつけなくちゃね、でも今はこの屋敷を出るのが先だ」

その時冷の無線からクリスの声がした

「冷、冷聞こえるか!」

「聞こえるけどどうかしたの?」

その時クリスの無線から大きな音がした

「クリスなんかあったの?なんかすごい大きな音がするんだけど?」

「それが今やばいんだこの屋敷でTウィルスの実験がされていたのはさっき話したな」

「うん、それは聞いた」

「そして俺たちの隊長ウエスカーは元々アンブレラの人間だったんだ」

「!何だって!」

「しかもあいつタイラントって言う化け物を放ちやがったんだ、それで俺たちは、今屋敷の屋上にいるだから冷も来てくれ!」

「わかったすぐに行く」

通話が終わると冷は菊に屋上までの道をナビしてもらい屋上を指した、

少年移動中

屋上に上がった冷はその光景に目を疑ったそこには巨大な男がいたしかしその男は人間場馴れた姿と巨大な爪が今にもクリスたちを襲いかかろうとした

「冷様!大変ですクリス達と戦闘しているあれがT103タイラントです!そして元は人間なので弱点は心臓です」

それを聞いた冷は勢いよくタイラントに近づき蹴りを入れてクリス達から遠ざけた

「みんな！大丈夫」

「ああ何とかなそれより冷！それよりロケットランチャーがある、俺はあれを使うだから冷はバリーやレベツカ達と協力して援護してくれ」

「わかった、バリー、ジル、レベツカ、準備はいい？」

「ああ任せろ」「任せて」「頑張ります」

冷達は同時に動き始め冷は接近戦をしバリーはマグナムジルはショットガンをそしてレベツカはハンドガンをタイラントにむけて撃った、そしてその隙にクリスはロケットランチャーの前まで一気に走り抜きそれを拾いタイラントに向けた

「冷！避ける！」

そう言う冷は後ろに飛びそれを合図にクリスはロケランを撃つたがしかしタイラントはそれを受け止めてしまった

「しまった！」

クリスがそういうのが冷はとっさの行動でサムライエッジを抜きタイラントが止めているロケットに向けて撃った、

「チエックメイトだ」

その言葉と同時に爆発が起きたそしてタイラントはバラバラになった、その後空からヘリが降りてきて冷達を乗せた、

「冷、助かったよ良くあんなとっさに撃てたな」

「そうね私もあれはさすがに終わったと思ったわ」

「あはは、ありがとうございます」

「クリス達はこれからどうするんですか？」

「私はアンブレラのことを探るわ、このままにはしておけないわ」

ジルはそう答えた

「俺は他にアンブレラが関係していそうな場所を探ってみる、リチャードの仇を取らないといけないからな」

クリスはそう答えた

「俺は取り合えず家に帰るよ」

バリーはそう答えた

「私は、わかりませんがでも取り合えず家に帰ろうと思います」

レベッカはそう答えた

「冷、君はこれからどうするんだ？」

「僕ですか？取り合えず祖父のところに戻ります、そして僕はアンブレラと戦います。」

「そうか、それじゃ目的は俺と一緒にか」

「そうですね、」

どうして彼らの戦いは一時的に終わったしかし冷にとつてはまだ始まってはいなかった、……

日後、白峰邸

「僕が祖父が暮らす邸にいるそれは父さんのがいったことを説明してもらったためだ

「おじいちゃん！」

冷が放つその先には白峰幻年齢61、元デルタフォース所属の軍人である、

「その声は冷か、そのようすだと仁の話は聞いたようだな」

その声はどこか威圧的なものがありそしてハキハキとしておりとても60代には思えない、

「じいちゃん、あの話はと言うことなんだ！そして桜ちゃんは どうしてこの事に巻き込まれたんだ」

「まあまあ落ち着きなさい取り合えず今はあの娘を呼ぶから少し待っていなさい」

そして彼は桜を呼び二人を椅子に座らせて話をした

「さてと、まずは君達に、いや桜ちゃん君はこれから人外として生きていくきはあるのかね」

「じいちゃん！いきなり何を！」「お前は黙っていなさい！」

「私は、正直まだ状況がわかりませんが、でも私はこの事には、逃げてはいけない、そんな気がするんです、だから私は、」

桜はこのあと何も言えなかったそれもそのはずである彼女がここ

までに至る経歴は尋常じゃないほど壮絶だった、

数日前、日本

彼女は日本にいたとき親とドライブをしていたその時彼女達の車はトラックと衝突事故を起こしてしまったそしてすぐに救出隊はきたが最悪にも生きていたのは彼女だけだった、そして彼女はすぐに緊急搬送され何とかな一命をとりとめた。しかしそれだけでは終わらなかった彼女は一命をとりとめたのは事実だが体のあちこちに酷い怪我をおい生きているのが不思議なほどだった、しかしそれを救った人がいた、その人物は、白峰仁、その人だった。彼はこの時研究の為に日本に来ていたそしてちょうど彼がいた病院に彼女は搬送されたその時に仁は重態の彼女をみつけた、そして彼は彼女にDウイルスを投与した。そして彼女は、Dウイルスに適合して劇的な回復を見せた。その後は仁と行動を共にしてその後アンブレラに捕まり仁は殺害、桜はアンブレラの研究所に連れていかれた。その後彼女は謎の部隊によって助けられ今にいたっている

「これが私が日本で起きたことそして冷君ののお父さんが私にしてくれたことですだから私はこの事には逃げたくありません」

「そうかわかった君の気持ちはわかった、それと冷、お前は どうするんだい?」

「・・・」

「彼女は覚悟を決めた、納得いかないのはわかるでも仕方ないのだよ起こってしまったことはもう戻れないだから冷お前も覚悟を決めなさいー!」

「・・・じいちゃん一つ頼みがある」

「なんじやい」

「俺に戦い方を教えてくれ、俺はもうこんな思いはしたくないんだ、だから教えて下さいー!」

「そうか・・・わかった」

「あの!・・・私にも教えて下さいー!」

「さ、桜ちゃん!?!」

「いいのこれは私の決めたことなんだから」

「・・・一年だ」

「えっ？」

「一年以内にお前達をプロにするそれと、修行はとても厳しいからな」
「わかった」「わかりました」

こうして俺らはこの、最悪な世界、を生き残るために一年の修行を
することになった、

第2章ラクーンシティー編第3話く動き出す歯車

あれから一年俺達とはある島で一年間の間厳しい訓練を乗り越えた。そのお陰か僕と桜の体内にあるDウイルスの能力である冷気が相手に触れていなくても自分が思った場所を凍らせることが出来るようになった(まあこれは桜と一緒にウィルスの能力の使い道と訓練をしていたからなんだけどこれはこれでなんかチートのような気がする)他には近接格闘や銃の扱い方やナイフ等の刃物系統の扱い方を祖父の部下に教わったそして極めつけには爆弾の作り方など、ほとんどテロリストまがいな感じだったけどそれでもなかなか面白かった。そして今は祖父の家に帰ってきた、なんでも話があるらしく帰ってきてそうそう呼び出されたのだ、

「まったくじいちゃんも少しは僕達のこと考えてほしいものだよ!」

素晴らしいながら僕は文句を言いながら廊下を歩いていった

「でも帰ったことをお祖父様でに知らせるのは当たり前だと私は思うわよ?」

「確かにそれは当たり前前だと思うけどね、少し労るってことを知ってもらいたいよ。て言うか桜はお祖父様で決定なんだね」

この一年僕は彼女と一緒にいて思ったのが、なんか彼女あの訓練を始めてから性格がはっちゃけてるような気がするのは僕だけなのだろうか?理由は主に彼女と組み手をしてるときかな、そのときは彼女と僕はゴムナイフを持たせられて模擬戦をしたのだけどもなんか言動が色々イヤバイ感じがした。なんて言うか、戦闘狂?的な感じがした。あとは彼女が僕にべったりしてくると僕の祖父をお祖父様と言うのはやっぱりあれなのかな?

「そこはね、やっぱりねこういっておいた方が後々ね、、、」

素晴らしいながら頬を赤らめているから多分あれなんだろうなやっぱりフラグが立っていましたよ、ありがとうございます

「まあいいや、取り合えずおじいちゃんの部屋についたから入るよ?」

「えっ!あ、うん」

僕が部屋をノックすると「入れ」と言う言葉と共に僕達は入った。

「じいちゃん（お祖父様）ただいま戻りました」

冷と桜が幻に帰国の知らせを伝えると幻は二人をまじまじと見て少し間を置いて話した

「なかなかいい面構えになったな二人ともさすがじゃな。そしてこの一年よくぞ訓練を乗り越えたな」

「それはありがとう、でもじいちゃん、一つ質問してもいいか？」

「いいぞ、それで質問とやらはなんだね？」

「じいちゃん、じいちゃんは元デルタフォースに所属していて隊長をしていたのは知っているけど、あの島の人達の装備していたものはどれもデルタフォースの正式装備じゃない、だからこれはあくまで僕の予想だけどじいちゃん本当は、ゴーストなんじゃ無いの？」

僕の問いにじいちゃんは黙っていた、でもじいちゃんはタバコに火をつけた、そして話を始めた

「いつから気がついたんだ？」

「大体半年したぐらいかな一人一人の戦闘能力が高いのもあるし様々な文学にも知識があるだから僕は思ったもしかしたらじいちゃんはゴーストなんじゃ無いのかって」

「まさかこんなにも早く見抜かれるとはな、さすがわしの孫じゃな」

そういうとじいちゃんは二つのアタツシケースを取り出しそれを開けて僕達に見せた

「お祖父様これはなんですか？」

桜がそう聞くとじいちゃんは少しにやつとしながら答えた

「これはお前たちの一年間訓練に耐えた褒美だ」

僕達はそのアタツシケースを確認するとそこにはあの島にいた人達が装備していたものとまったく同じものが入っていた。

「じいちゃんこれはー」

「これからお前達はゴーストじゃ、そしてワシはゴースト部隊の隊長をしていた。しかしワシはもう年だこれ以上は身が持たんだから冷そして桜お前たちがこれからのゴーストを引っ張って行くんだそしてあの忌々しいウィルスをお前たちでこの世から消し去るんだいな」

この時僕は思ったまさかじいちゃんがあのアメリカ最強と言われるほどの伝説のチームゴーストとは、やっぱり勝てないなと思った。

「どうやら僕達はじいちゃんにはめられたみたいだね」

「そうね、まさか冷のお祖父様がこの国の最強チームの隊長をしているなんてね、私も驚きだよ」

「それで答えはどうかね？」

「僕達（私達）はゴーストとしてそして幻隊長のあとを継ぐものとして、必ずやウィルスをこの世から消し去ります！」

そういうとじいちゃんは僕たちの敬礼に対して敬礼で返した、

第4話ゴースト始動

ラクーンシティそれはアメリカに位置しており様々な人達が住んでいるしかし今はこの都市はあるウイルスが漏れそれが人々に感染し感染者は死ぬという謎の奇病が起きていた。しかしこのウイルスはそこで終わらなかつた、そのあと感染したものはまた動き始め生きていく人間を喰らった。そして感染者に噛まれたりしたものはそのウイルスに侵され死にそして感染者となる。そんな地獄と化した都市ラクーンシティ、そんな都市に多数のヘリが向かっていた。そしてそのヘリから多数の人が降りてきた。

ゴースト

それはどこの国にも所属せずそしてその戦力はどこの国にも劣らない最強の部隊であり白峰家が作り上げたのである

そしてなぜゴーストと呼ばれ世界最強の部隊であるの代々白峰家にだけ存在するウイルスを改良したウイルスそのなもPウイルスβこれは投与した人間の身体能力そして傷の回復を速める能力を持っているそしてゴーストはPウイルスβを全員に投与されているためである。しかしこのウイルスは世間的に発表はされていないため存在を知っているのはゴーストの隊員および白峰家だけである。

祖父からゴーストを引き継いだ少年白峰冷はラクーンシティで起きたことを解決すべくヘリで目的地に向かっていた。そしてヘリの搭乗員には冷と同じくゴーストを任された篠原桜、そして他に二人金髪で兄妹の人達名をジークミラーそしてアリスミラー。兄がジーク、妹がアリス彼らもアンブレラに人生を狂わされた被害者でありゆういつPウイルスβの改良型Pウイルスと適合した兄妹である。

Pウイルス、それはβを改良し身体能力の上昇等の他に一時的に物の動きを遅く感じることが出来るウイルス活性化がある。そしてそれを改良したのがDウイルスである。

side

「もう少しで目的地に到着します皆さん準備はできましたか？」

ヘリのパイロットは冷達にそう言った

「わかった。皆準備はいい？」

冷がそう聞いた

「私はいつでもいいわよ」

桜がそういう

「俺も準備は出来ている」

ジークがそういう

「私も準備はオーケーだよ♪」

アリスがそういう

「わかった、皆準備は大丈夫です」

「了解しましたそれでは今から降下地点に移動します」

ヘリパイロットがそういうとヘリが降下地点に近づくと四人は早々に降りた

「それではボス我々は市民の救助に向かいますですがなにかあれば無線で呼んで下さい、我々一同はボスや皆さんを信頼していますので」

「わかった、なにかあったら連絡するからあと皆死んだりしないでよ」

冷がそういうとヘリパイロットは少しほくそ笑みながら答えた

「大丈夫ですよ我々もこんなときの為に訓練して来ましたから。それではボスそして皆様御武運を」

そういうとヘリは他のゴースト隊員のもとへと向かって行った

「さてと取り合えず皆自分のナビを起動しておいて」

「わかったわ」「あいよ」「わかったよ♪」

そういうと皆は自分用のナビを起動した

「……………起動完了お久しぶりですね冷様いえ今はボスと言った方がいいですか？」

「菊までそう言わないでよ少し恥ずかしいし」

「そうですか分かりましたそれではいつもどおりでいいですか？」

「それでお願ひするよそれと菊他の子達に今までの情報を送信しておいて」

「了解しました」

「それじゃなにかあったら聞くからそのときはよろしく」

冷がそういうと菊は桜達のナビにアンブレラに関する情報を送信するとスタンバイモードになった

「さてとじゃあ皆今回の目的を確認するよ」

「あいよ」「わかったわ」「はいよ」

「目的はアンブレラがこの事件に関わっている証拠この先のアンブレラ研究施設に潜入して探しそれを見つけることなただけどなにか質問はあるかな」

冷がそういうとアリスが冷に聞いた

「冷お兄ちゃんもしアンブレラの部隊が現れたらどうするの？殺っちゃっていいのかな？」

アリスがわくわくしながら聞いてきた

「うんそこは構わないよ、でも敵意が無いものにはてを出さないでね」

「了解」

「他にはある？」

「他のは皆はないと言った

「よし！それじゃあ皆はミッション開始だ」

「そういうと彼等はアンブレラ研究施設に向かって動き始めた。

同時刻

ゴースト side

彼らゴーストは今市民の救助をすべく現地の警察 R. P. D と協力してゾンビの掃討していた

「こちらアルファゾンビの数が多しヘリでの支援を要求する」

「了解これより機銃での援護を開始するアルファチーム離れないと死ぬぞ」

そういうとヘリはゾンビに向けて一気に機銃を撃ちはなったとその一発一発がゾンビの肉体をえぐりすぐに肉の塊となりオマケ言わんばかりのミサイルを放ち大量のゾンビが一瞬にして消え失せた

「(ゴーストばねえー!)」

これを見ていた警察は驚きを隠せなかった。しかしこれだけでは収まらず後に語られることだが何処からともなくステンバリーと聞こえると一つの銃弾がゾンビの頭を貫通しその旅にビューティホーと聞こえたり、ごつい装備に包まれた男達は何人も集まりガトリングを撃ちまくったりして盾を持ったものもおりその人達はゾンビをはるか遠くに飛ばしたりと耳を疑う話が多かった

しかしそれのお陰か多くの人間が助かったと報告が多数上がっていたという

隊員紹介

隊員紹介

白峰幻

白峰冷の祖父であり白峰仁の父親、元デルタフォースその後はゴーストのボスの座を引き継いだ（今は冷が今ゴーストを引き継いでいる）射撃もさることながら接近格闘CCC等の技術を兼ね合わせている

白峰仁

白峰冷の父親であり白峰幻の息子。幻や冷とは違い研究気質であり白峰家の身体に流れているPウイルスそして白峰家そのウイルスを改良したPウイルスβを研究していた。そしてそれをアンブレラにめをつけられ初めは拒んでいたが冷を人質に取られたためやむ無く協力していたそして冷が脱走したことをきにアンブレラから逃げ日本で身を潜めていた。その後瀕死だった桜に自分が作り上げた世界でたった2つしかないDウイルスを投与した。その後アンブレラに見つかり射殺された。

白峰冷 年齢（17）

この物語の主人公として白峰仁の息子であり幼馴染みの篠原と同じく世界でたった2つしかないDウイルスに適合している。戦闘技術は高く他に銃のカスタマイズ等にもたけており射撃やCCC等を祖父から教えてもらったため祖父を除くゴーストの中ではトップクラスである。そのためかゴーストの隊員にはボスもしくは隊長と言われたりしている。仲間思いで状況判断に長けているため若いながら他の隊員に認められている。そしてDウイルスの能力で冷気を操れ他にもDウイルスを任意で活性化させ自分の身体能力を底上げし、その状態になると全ての動きがゆっくりに見える。

篠原桜 年齢（17）

白峰冷とは幼馴染みで冷と同じくDウイルスの適合者である性格は明るくすぐにまわりに馴染めるが気分が昂ると性格が変わる。そして絶賛冷にアタック中らしい。

戦闘技術はそれなりに高い。接近では格闘よりもナイフをよく使う。そして冷と同じくウイルス活性化を使える。

ジークミラー 年齢（17）

金髪の少年で年齢は冷と同じで性格は妹思いの優しい兄である。アリスミラーの兄で冷の部隊のメンバーである。彼ら兄妹はアンブレラで実験台され命からがら逃げ出し偶然出会った幻に保護された。そして彼らにはもともとウイルスに対する抗体を持っており幻は彼らにそれぞれにジーク達の抗体とPウイルスβを合わせた彼ら専用のウイルスを作り上げ彼らに投与した、そのお陰か実験台にされて衰弱から回復した。しかし冷と桜がもつDウイルスとは違いウイルス活性化しか使えないが他は変わらないがそれでもかなりの戦闘技術を持ち合わせている

アリスミラー 年齢（15）

金髪の少女でありジークミラーの妹。他のこと比べると背丈が小さく言動にも少し幼さがあり他の者にもお兄ちゃんやお姉ちゃんと言うためゴーストのマスクotteき存在である。戦闘技術は冷達よりは劣るもののスピードは誰よりも速く相手の懐に飛び込みナイフや銃で殲滅する戦いかたをする